

真際雜記

四十九

和書門			
二七八四二號	八函	三架	六九冊
類			

内閣文庫			和書
二七八四二號	六九冊	三架	
類			

内閣文庫	
番號	和 27842
冊數	69 (48)
函號	213 3



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

乙卯雜記四十九

其時二年乙卯七月五日
同年八月廿八日
福脫

真際雜記甲乙

隱士真如實際伴山業智真際知

北條早雲尾宗瑞の伊豆の並山城行の年去

同國修禪寺にて煙をくみ給相山は湯女又

園丘を築き金山山早雲寺殿を長宗瑞古禪

院門と法禪

一 北條新六郎氏綱の息女は古河の公方危る迄

基高の崎晴氏の所産也

一 享文十年七月十九日北條氏綱年去湯女早

雲々、蘇法名書松院敷快舞治と存土
一 藤樹津江氏群の系字の性申通名と在馬の
江西言島郡小川邑の之に慶安元年戊子に
月廿五日癸卯四十一男宣能通名と在馬出子
及之孫孝子孫三年 晩より江西又内務省有出
生と置

一 熊沢了女ら安の之に本姓四虎通名法中の内務省
書多と成て熊沢助太夫の之孫名に伯継息遊と号
元禄四年の月十七日辛酉年七月十三日して徳吉河と孫

一 慶長年福抄書

一 慶長六年辛丑七月廿九日上杉系勝野原書津十部
百方石と成米田と地三十方石と云々

一 浦生系三市秀行時中野字老信上杉田原と内務省
揚六十五石

一 九月廿九日河邊城の事と信松成所と在地層切と下
背月松原に在る勝重法政河原等 事老所可成信

一 十月内書書抄 ありふる有る和京四九 在書と

一 北月 鶴山と三十石所多進

一月を國ちの神に二万石の奉進神とと古田見
才務系神延ち副兼雄あ月十の喜出神出
有

一言山本倉之鳥山と石田一徳を果

一月七年壬寅二月の月内府権從一位勅許

二月初日井伊右衛門直政年四十二年去嫡子直政

十三歳家督の日

一月伊達薩摩守宗直松本藩新松号仙臺

二月三月の連多陣延也延多延多三月三月の連多

養育

身の齡より一年の初子教 云仍

日教も限りある事乃こそ 延巴

長閑成に教あり言の成清と 昌孫

此等二を向禁むる由世に汝等有延巴延等

郭多傳つる言や名傳教 昌比

之傳やんを存のたのふ事 兼女

一月月十の志津彦伯の薩摩大隅吉國安松と

物系下らと

一 正月十二日 瑞隆水元 概百流中 或重致也 子系
 泉老 以所獲 瑞水 万石 正減 於 朋 分 結 固
 砥 沃 道 二 十 万 石 七 下 下
 一 結 固 東 幸 中 實 季 上 減 結 固 以 十 万 石 於 瑞 水 完
 元 五 万 石 七 下 下

一 松 城 但 言 者 以 知 興 方 松 城 十 万 石 七 上
 一 月 廿 六 日 內 府 松 城 母 与 松 城 方 万 石 瑞 水 遊 考
 一 十 月 十 日 有 幸 中 瑞 水 瑞 水 二 十 万 石 考
 一 日 以 年 癸 卯 二 月 十 日 內 府 松 城 為 瑞 水 考 瑞 水 瑞 水

車 兵 杖 為 瑞 水 瑞 水 瑞 水 瑞 水 瑞 水 瑞 水 瑞 水 瑞 水
 一 半 日 後 田 之 左 馬 山 松 考 土 井 志 三 年 古 松 考
 一 松 城 四 年 在 集 伊 考 考 松 平 傳 三 年 松 考 考 任
 一 月 廿 七 日 秀 賴 內 方 長 昇 進
 一 同 月 廿 八 日 松 考 地 表
 一 七 月 廿 八 日 秀 賴 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考
 一 瑞 水 瑞 水 瑞 水 瑞 水 瑞 水 瑞 水 瑞 水 瑞 水 瑞 水
 一 月 十 日 瑞 水 瑞 水 瑞 水 瑞 水 瑞 水 瑞 水 瑞 水 瑞 水
 一 月 瑞 水 瑞 水 瑞 水 瑞 水 瑞 水 瑞 水 瑞 水 瑞 水

一 宋高宗信使 女子の嫁伊内多利長上出給

一 一と妻の女等得妓お國お重子 ~~お~~ 重子入御前給

一 十一月丹後守等出使 長等松常陸吉慶一万人以下

一 十二月山岡及河内等出使 甲午年以下

一 同四年 甲午七月 勢正等使如出給 同國多

松平後

一 十一月松平長房松平重頼等松平重頼等松平重頼等

一 同封習坊三三所名牛子代等出給

一 同月亦三三君松平長房等松平長房等松平長房等

一 十月松平之宿松平長房等松平長房等松平長房等

一 本朝系考の至是是と左國松平等松平長房等

一 同松平長房等松平長房等松平長房等松平長房等

一 等而下之云松平長房等松平長房等松平長房等

一 日本系考を松平長房等

一 同十年乙巳四月十九日 右松平長房等松平長房等

一 十二月廿二日 南海洪波の丈高き四尺一松平長房等

一 望松平

一 見系考信房の系統通松平長房等松平長房等

思田侯よはらたえまらふ寛高の季子と云徳四年

甲午の月廿七日政年の十五辭世

故方の一和詩のるしして十勝の夢をえ我
墓志のいふ中固定直知と銘曰

恭然思道 極精造微 愛物尚勞 遠く子歎

韜彦増頭 徳遜有輝 遺刑存第 後學示危

陸奥公能和尚の洛東の古徳四十未漢の遷化し

伊豆女身たるふ長徳字の心彦に高きまの三三三

法藏ニ言院光堂の別よ集

一 播尾筆力吉晴のまゝの十三年 魯尔尾張國丹時

郡法法遊邑よまゝのふの伊勢吉之 幸名に五九

考公よりあきりのりい歳古岡長濱城をとりし

比吉晴二百るまゝの九年 古岡形跡へ移りし時

千五百るまゝの三年を格同十年 善徳國言

濱城一百るまゝの吉晴四十一歳の時と後國國の

危梯へ二百るまゝの所留後四百るまゝの危梯へ

移り十三百るまゝの濱城へ移り移る故前府中

の万石増封慶長五年古岡侯は古岡を格同

十七年一十おし一年

一 乙卯三月はより四月比あり陸奥津駐艦
結団形より初て庄内藩より津守と達上り同國
米所陸奥津駐の近迄舟赤く取向くたさ
橋の如く成氣縣まおまおを堰井の筍井指
等々悉く堰たせしと云津守と藩とま三月下旬
あら何地へ移り人新しきもそ風吹ん
一 四月二日比より初て石名國へも氣發陸守
と多敷を——んておらまの山野より渡りてお書を

成人ちと園り——おちき成捕を世中へ埋めよの家の内
中捕水籠の類はおしおおおし入信入率しりしよ
三月夜のるは三十七の嵐を難はるう——た
生れよと感せん然もよ子思後成り毛黄なる
龜敷あおて嵐を元障ふりり懸——是よて
人氏あり——安存する喜おぼろりと同國の
濱向う津和野なる代友よりう評ありし
此節ありしと**津井**泰山はあたるの流しとて
七月十日麻岡控塔の流

一 小條早雲伊豆入攻りし時、陣のよきれ
き載りしを、終に三條に

禁制

- 一 那由入迄、及男よ手を載る可
- 一 一残の當る物、何よても、取ら可
- 一 伊豆國中の、所番士民よ、遠に、軍解を、去る可
- 一 右條に、出く、令傳止、畢ぬ、及遠、把の、案、控有、と、在、の、^取取、方、よ、く、も、の、こ、仍、執、達、如、件

延徳三年四月

此時早雲二十歳、男新六市氏、初五歳の時、早雲
赤氏、世の世よ、て、と、法、左、亦、時、條、よ、る、と、と、赤
己、し、し、理、り、こ、如、け、既、や、世、の、法、及、法、左、の、
教、子、万、箇、條、を、や、呼、呼、

一 今川伊孫、入、了、了、後、の、云、慶、集、を、書、れ、る、^{意、取}意、取
^{正、年、の、時、}正、年、の、時、よ、り、了、了、後、に、十、三、歳、の、時、に

一 奥河津、蘆、名、の、修、理、出、支、盛、言、の、女、兵、利、の、陣
取、渡、又、官、仕、せ、し、る、軍、薙、者、有、一、後、に、と、女、を
奪、得、り、て、男、子、誕、生、有、是、則、と、海、傍、に、あり

年十一にして稲荷寺の別當辨為の才を判授
定戒す

一 安房の里人の二本氏の古撰の三浦が同の傳
西本時継の流記

一 井伊直孝のお流の言秘の勇士を善なる為りて
才の才の高き非ずとて身を戒められしとて

一 尾花左馬のふらぬ宣流左馬村を任潜攻の國を統
りしは三十五年五國征伐の後没せしむる

一 三十五年を言虎亦二歳思國を言可三歳回
長崎十の歳小早川隆業五十三歳官部晉祥坊繼
田六十歳

一 後撰和歌集^三巻下

三月のあの日をふまうていぬといは侍
又のあゝ又まうけ侍るる 勇也

又七時を思ふ静ね成方はあれた惜き善哉
君さくくして同一年よちうんまうりよるる

一 徳秀方の陣三返方約を臣利言氏公延文三年成
四月廿六日薨去社五十四徒返危古屋よ務らん

口述と改元祿三 丙午年改元代世業物

一 易筋肥の土井上和泉守國貞和泉守國貞法名及和子國貞

もみ筋肥の土し寛文十一年真政と号す實名良助能信

了海の心して聖号し通稱云真政法界淨土

國貞元祿の代より後ハ里法肥と号して士と成

一 真政と和元 壬戌年十月日。改元義聖号す真政の真政

居士

一 南老齋院棟綱元祖之法中免禪房院弟

一 按て吉乃銘繼四卷云改元義聖の宣列ハ中河内在云

若菜長和按て在子按年

中河内在云此長和の祖父を親法と云中貞の監藏

抄文

一 山城の國粟田氏の伯人棟綱大中興亦ハ中國大和

信上郡丹波市の人云男國綱同解ハ伯棟多ハ市

を近江監老て及らた近江号法師也云長寛元年ハ

生建長七年ハ改元ハ十三云男國光新ハ五云

孫父の死後猶亦新田居和兼任ハ國宗のハハ成

亦亦種愈ハヤウして山内ハ伯姓ハ長谷部建長

二年より生延慶三年政年六十三生男大建坊祐慶
建久の年生世五十一して慶可二落山松お家(後)
おりのゆり口通と成(中)元富年百三十の

一新後五國光の弁子よ後三(中)り光(治)元年生
弘安三(年)の政年六十三生男國崎五(中)入(心)宗
文永元年より生康(心)三年の政年六十二生妻貞宗
江(中)河郡(中)本邑の(心)永(心)年(生)貞宗
政年五十二右(心)れ(心)刀(心)通(心)の(心)妙(心)吉(心)よ(心)生

一伊勢國 桑名 千子邑の河村(心)の(心)宗(心)の(心)世(心)宗(心)

四年より生治名妙基(心)生(心)法(心)村(心)の(心)生(心)法(心)も(心)村(心)心(心)五(心)郎
免(心)生(心)法(心)も(心)村(心)心(心)生(心)法(心)の(心)村(心)心(心)生(心)法(心)も(心)村(心)心(心)五(心)郎

一(心)中(心)河(心)河(心)の(心)元(心)祖(心)妙(心)中(心)の(心)五(心)條(心)宗(心)統(心)三(心)位(心)刑(心)部(心)心(心)言(心)也
の(心)庶(心)子(心)也(心)も(心)ん(心)よ(心)や(心)有(心)る(心)ん(心)五(心)條(心)宗(心)より(心)お(心)く
言(心)也(心)何(心)様(心)よ(心)ま(心)は(心)区(心)判(心)氏(心)心(心)い(心)て(心)後(心)後(心)指(心)留(心)の(心)案
と(心)た(心)よ(心)遊(心)氏(心)心(心)成(心)心(心)爾(心)の(心)五(心)條(心)宗(心)より(心)世(心)言(心)信(心)統
る(心)り(心)る(心)一(心)享(心)和(心)三(心)年(心)妙(心)中(心)四(心)百(心)五(心)十(心)年(心)心(心)五(心)條
為(心)往(心)心(心)より(心)信(心)兼(心)心(心)服(心)を(心)持(心)宗(心)右(心)殿(心)心(心)揚(心)り
生(心)信(心)也(心)心(心)揚(心)り

近哭所本居士 参議式部右輔高徳
源事お屏府 悠然觀育力 百年之骨朽
四海姓名言

一 中阿保光統の父光二の京都所司代多賀守高徳の
言右の孫として中阿保光人の妻をとりし光人
は實子光利おませしうの列の宗を興せしこと
一 彦刀の教百年の我國を治て母を弑するの教百年
新刀の肉を弑するの教三度と置し是を母を弑して
痛んへんを新の業ちある教千載を治て尚

用るは堪らう哭五百年の物まよはて佩まじ
うんこまう遠く侍るを思ふよし能てこの用は
元る物ちんや彦の刀細用るは堪る時は繁り
てこの刀細初て用る所有へし新刀を愛するは自
佩るるをふあし是を子孫の侍へ新刀を
能ふふしこの刀高き遠くへし是を後世に遺
んる志有をも皇國の氣を地をたよ絶するのち
らんをい織を裁の刺を售り花をうらの母を換
教百年の後よまして教百年のあのみま

くんとく 野百華の後古口用とて思ふる時より
その新口是より出立て用ふとて思ふる也

若弟長相摺

山崎也

一 肥後の同田勇ら加茂陣守の継治（文昭）に生かす

鎌倉比正 此生一教皆業物也

肥後菊池治同田勇上座の國康と云ふ也 兵部世云

肥後國同田勇右衛門 上赤弓家也と云ふ也

同田勇延津元龜 同田勇言のふるを治助時盛等

肥後國同田勇左衛門國長 （慶長） 同田勇守軍元龜

同田勇上座又二國を言ふは陣守屋也

肥後國同田勇法雲 肥後國同田勇延俊

又二 治兵衛 （慶長） 二郎 賢次 賢宗

賢人 賢信 宣成 賢孝 國孝

右何れも同田勇の二教也

一 中務録治考十三巻川城五舞經同三年右史魚抄

摺寛政二年丙辰刊行

一 白帝書藏一々の左の法團終行の （此系）

一 田圃秀上座の口國九代菊池仙左衛門三法の子
 三秀の一人として多岐の務めあり
 一 寛永十一年甲戌九月廿七日於望 上資研
 歿所 初道云舎と面と禮勝負

中谷庄統河
 伊友 井場首比軒
 浅山一信
 初廉徳信
 初比素延

博多行人
 牛内如雲助
 仙臺藤仲
 由比 巨入
 仙臺黄門三宗
 祐元祖守
 三代目
 播尾山城守
 若沼折戸守

和歌押生伝

柳生系

出中納戸

原 石川文四郎

其旨

沼川懐珍軒

紀多士

原 園口延吉

小石川

原

西川陣東高

出云三浦源中

右之保彦左衛門教

加賀元甲斐守

上野宮庭

樋口十中兵衛

原 甲子仲繁

伊藤五郎兵衛

園方三郎

志本又左衛門

森山養三郎

寛永十一年

備中伊吹郡

芳野一人

寺邊三郎

長波一刀

以上

一 安政三年乙卯七月十日御定解

一 石河村石河に於て、腰刀持者腰刀持者に於て、

秘伝秘伝に於て、石河村石河村に、腰刀腰刀懸置懸置に於て、

孝行孝行に於て、石河村石河村に、腰刀腰刀懸置懸置に於て、

石河防方石河防方指方指方に、及て、石河防方石河防方指方指方に、

村村に、及て、石河防方石河防方指方指方に、及て、石河防方石河防方指方指方に、

石河防方石河防方指方指方に、及て、石河防方石河防方指方指方に、

石河防方石河防方指方指方に、及て、石河防方石河防方指方指方に、

石河防方石河防方指方指方に、及て、石河防方石河防方指方指方に、

石河防方石河防方指方指方に、及て、石河防方石河防方指方指方に、

物多き事と云ふ事ありし時氣をち中世末時節は
車和揚の切所多編多も野通と喰倒は
孝化喰荒く年一合の味は方におるる三百六
豆舞前月方中身は成中位は信は正徳中と云

卯七月

若代指し助

中又時氣指方と成手信末代お役名國は書置
と通多の真数指方は常村と一何時お筆勢を
門三屋おと多く冊精を存し右真教と外中難を
埋置物荒を耐候お方右中仲は疾入死出候と
救多候有と且去月下旬比は村と老老黒
洞裡成回氣指方は右仲氣を造りてお筆勢
と助を乃一際聖氣減方おるる候と云

一 近世云々しし浮世画師葛藤水高仲風の伝書
ししは生書系抽寫可を扱入すしと細うと
引裂皮^内また土綿入生厨一合を入しは酒の
積ちを度うして腹せしは病息ち奇しく
然るは高書生画ししは一七の七三の
入得ししは又速く元の病は返りしと云

海^の柚を用ひしりし又快く成て毎いほ福藪
 せんかす降葉迄長生ししう此方酒藪
 世四時の内ちすれ必し初葉しし水言門人葉の
 活あり限五利和の後し柚の花葉のみさきま
 柚成葉し入て可し又三言四言五言六言七言
 入ても可し今のち柚ありしは厚くししを
 多時の葉物成るの四季葉は珍葉物多れし
 何時よてもまよ又易し葉は奇葉し
 玉子酒の酒葉碗し三つ玉子し半してはしし葉
 一 打刺冷酒は樽交て編みて沸ひ白粉搥入るも吉
 一 早造り耳酒の尾酒も手取拜用して法は直統拜
 水拜五言入搥鉢にて能すすのちまてにし
 右三言編み又とろくしはれん時の多しお^赤るし
 一 新まのの葉のしりしし白言推葉を秘種水は法直
 時の生推葉しし物し

一 伊勢國仙五村三系圖

一 祇園の社司沼古重作布伊織葉系系河邦若古力
 務多古力左左寛政四年壬子刊行

村心 身徳比

曆名四半生
妻名仙五村心云

村心 直徳比

村心 直徳比

直徳比

村心 直徳比

村心 直徳比

村心 直徳比

直徳比

村上 直徳比

直徳比

直徳比

直徳比

直徳比

直徳比

直徳比 村心の才子

直徳比 直徳比

直徳比 直徳比

一 國祠

中國藥田片長四十二歳より山内片長五とた近

直徳比廿二歳長寛元年より生建長七年より死

九十三歳

國宗

備前三市山内住治承四年より生直徳比廿歳より

直徳比廿歳より生直徳比廿歳の時又備前(備前)又

直徳比廿歳より生直徳比廿歳の時又備前(備前)又

後倉の傳藏西行寺殿百七の云云永七年死
九十四

國光

新羅王と云建治三年ま生ら歳十七又國權の
別ん國宗の弟と云成治其比事廿九歳の時云
廿二歳と云仰ふ別ん建治元年死二十歳法名
光心

光心

國光の子と云坂三郎二治元年ま生治安三年

死年ハ十七

心宗

同慶五市入道心光の子ま治安三年ま生十七
又ま後ん新羅王國光の弟と云成建治まより
死國修りハ又七十歳まて法國をハ終ハ
十七ハして御國康永二年死年ハ十一

貞宗

心宗の書子孝四市と云心安元年ハ生ハ又
也ハ生ん初名助貞と云貞和五年死年ハ十一

一 大進坊祐慶法師の弟五国光の四男建永五年に
生れ五歳の時日光より十五才ありて出家後醍醐
と成貞永の比に彫物の名ありて中元年に死年
百廿一

一 教仲松庵よりなり右言先教弘の正宗の弟なり
三安元年に生れ三仲二年死年廿七

一 肥後南池田回勇上座女兵部左衛門少輔比加藤隆信の
孫治 上座女國房とありて 隆信
三國 隆後 左夏又 又の 左集

右何れも同回勇一教慶長後の事物なり

一 中河内系の子り五傳系の子子し中本と云

中本 中本 中本 中本 中本 中本 中本 中本

中光 中光

光余

中河内系の子り五傳系の子子し中本と云

光徳 光室 光温 光達

光常 光忠 光勇 光純

光接

一 乙卯七月晦日危の執事あり病癒よく引籠るん
しつ月四日

松平和泉守
松平伊勢守
江合
老優

右新と通作後御免

- 一 右御掃部元身守代格為漫筆上五五筆上詳
- 一 右世にをんちよき然として為世のん有とら必
子孫有疾馬刻活のんは子孫也
- 一 戸簿を因るよ寸残し学履本籍を踏敷し七脱

重く皆好家のんし

- 一 江信氏一帯に吹る葉花より百文の可可做言し味最
も除長しこの衣服居恒よりも除官の活にを分分
んねくし担擧ちんり月と病ちく前と難ちく子孫
も福有流巴の才資を感はしんり節多し立言し
- 一 山中幸内名和長平の後胤ことち常は戸よあるは
二と二子皆七十有歳の老翁よて傳家よ達紳せり
見り孫子時用と云書も共し甲辰二胤を二那の
書よ集む牙の軍家よ神とを云くしし皆願

人乃有て唯し難いれと廣内七雨志成
然れは右程を薄物として意後の物を禁
へし人の治らふ事をして厚意を不承とあり
其孫元重の事といふも有し其自筆し其已
一政の簡物あるを言ひ其形を宗とあり
能くも場接たる人といふは徳曲海私する人
深き國好意が難しと簡物の事いし薄物より可也簡
こと云は備に遠く之を隔てしうといふ事ありし薄
もの公の臣悦とあり

安政二年乙卯八月七日 阿部何勢ひん殿 信渡

三書り

所政懸と成

所代と様と

思ふをいふ所の程ありし世に
その事し得る事なるま昌年と化して流るる
老翁お乃座席にお座り万端は年を成り
其意と手教ありお指し其意傳ふ和徳と
所おんふお遊り時と近き話あり信入信

いふと先づ此書に並ぶもの有りては其後
列の非帯と此の愛所要と或は此度迄
可格別簡易と此制を以ての復結を以て
旧者手重と立格を以ての省便と並ぶ士風
右の如く遊交との思ふは進んで
行ぬる事と有りては一固たる
其の基き万端事の中を研考用と心得
と格格と右節を以てし
右に通ふことと此の如く

右に通ふ事と此の如く
一節

- 一 麻布老塔町立地とあるは深考なる事有り
- 一 乙卯の月也。

一 格級老老
田安殿老老

此動定事は河村河孫と

此動定事は

石河老塔

田村河孫

此書は

石谷周情

右ノ通。作甘々

一 同月六日 湯島平年 濟宗因四年 其子の妻
津島常五 四半時 此病也

一 同月六日 院七半時 寺真高 重^重の母 孫才

右は 妻 法 送 元 甲 卯 子 長 乃 新 長 の 孫 三 毫 重

一 男子 同 苗 新 氏 中 病 也

一 同月 初 五 時 道 弟 臣 左 馬 病 死 四 半 三 點

一 同月 阿 部 伊 勢 守 殿 法 後

右目付也

法向新後。作有常。情達。唐福。是手

重。向。し。有。く。は。子。是。道。お。達。三。毫。孫。も。有。り

は。如。光。角。田。解。子。お。止。新。後。三。毫。對。法

向。三。毫。く。手。數。の。お。裁。は。裁。お。や。お。此。度

所。政。重。勢。解。は。有。法。而。也。作。お。孫。も

有。く。身。然。了。別。の。尊。お。お。乃。三。毫。く。手。數

者。お。お。有。者。お。孫。お。止。ん。お。遠。く。手。數。と

お。中。會。

右ノ通。右ノ通。右ノ通。

月

一 藤原のよき言まは古田殿部を内膳部に遷すの事
 古田殿部の名は古田の終りをなすべしと
 云ふは教年を經て殿部益盛にして名成り高
 よまは古田の終り今もその名をなすべしと
 云て遷す事盛にして河の傍有べしとも是を以て櫻
 の上を評すべしと相なりと云ふも是を以て櫻
 如新なりと云ふ事ありまはまは慎まらばと云ふ
 古田内膳の散削實は赤い心浮らむと云ふべし

然れども古田は於我を遠るべしと云ふは
 うつり一生の事なりと云ふ 遂に思ふ事ありと云ふ
 事として遠年浪蕪の役は殿部転運を企て
 遠敷免し遂に殿部を自裁ぬはは古田殿
 部人長らぬ事ありと云ふ古田の終りをなすべしと
 同くは古田殿部の古田の古田殿部と雖も唯
 みる風情ありと云ふはと云ふ是物をなすべしと云ふ
 信ひ見よと云ふは雅部下有と云ふは電氣也と云ふ
 聖帝をなすべしと云ふは此話の事

中子有^レハ^レハ書名を考^レ

真高書^レハ^レも看^レ古^レする^レハ^レ骨格^レ容^レ貌^レ
以て^レ予^レハ^レハ^レ運^レ業^レ的^レ也^レ一^レ種^レ一^レ生^レハ^レ也^レ
以^レて^レ予^レハ^レハ^レ百^レ數^レ百^レ中^レハ^レハ^レ也^レ運^レ南^レ山^レ云^レ
と^レ然^レん^レ古^レ二^レ生^レハ^レ也^レ看^レの^レ後^レハ^レ也^レ難^レ也^レ
難^レハ^レ也^レ活^レ也^レ居^レて^レ凡^レん^レハ^レ也^レ已^レの^レ人^レの^レハ^レ也^レ
知^レハ^レ一^レ生^レの^レ人^レを^レ考^レて^レ一^レ生^レの^レ運^レ業^レ也^レ
申^レん^レハ^レ難^レ也^レ必^レ遠^レく^レ也^レ一^レ生^レを^レ考^レん^レハ^レ也^レ
聖友^レを^レ及^レぶ^レも^レ也^レ同^レる^レ也^レ

又云此古回藏部^ノの^ノ跡^ハ何世^ノの^ノ後^ニ於^テハ^レ料^カ能^ク
月^ノ待^ル也^レ昔^ノも^レ也^レ所^レを^レ考^レハ^レ也^レ一^レ生^レハ^レ也^レ
何^レハ^レ遺^レ代^ノハ^レ也^レ考^レテ^レ一^レ生^レハ^レ也^レ古^レ回^レ瑞^レ也^レ

一^レ指^レ圖^レ右^レ東^ノの^ノ後^ニ於^テハ^レ也^レ考^レテ^レ一^レ生^レハ^レ也^レ
五^レ百^レハ^レ也^レ所^レハ^レ也^レ指^レ宗^レ院^レ也^レ也^レ也^レ

一^レ隆^レ興^レ仙^レ臺^ノの^ノ近^ニ傍^ル也^レ書^レ麻^レ官^ノ云^レ有^レ神^レ跡^レ也^レ
以^レて^レ予^レハ^レハ^レ也^レ社^レハ^レ也^レ社^レハ^レ也^レ社^レハ^レ也^レ
若^レ源^レ判^レ友^レ考^レ也^レ社^レハ^レ也^レ社^レハ^レ也^レ

神靈を祭る事と云ふは神の現存の神と云
りたるは徳胎神草字を拝する葉の葉を添る
時とてその葉を添るものも有とてその葉の
仙臺の江戸の都のふ納へて其葉を添る
魁星のまじりし是を添るは葉を添るは葉を
すんの神風の性数なるものなり 海へおまの
手元よりある事なり 一 年を成を添るは
愛知乙卯の月十日の友人の葉の葉を添るは
赤尾仙臺の葉を添るは葉を添るは葉を添る
中直三の葉を添る

その葉を添るは葉を添るは葉を添るは葉を添る
一 葉を添るは葉を添るは葉を添るは葉を添る
福の時を添るは葉を添るは葉を添るは葉を添る
成とて葉を添るは葉を添るは葉を添るは葉を添る
伊勢の葉を添るは葉を添るは葉を添るは葉を添る
葉を添るは葉を添るは葉を添るは葉を添るは葉を添る
よて葉を添るは葉を添るは葉を添るは葉を添るは葉を添る
の

一 三尾新三郎 法名 思齋院 一巻書 及 居士
 一 谷田田柿平常信 及 常信のふ 一 尾下 及 尾下 尾下 尾下
 赤坂 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下
 一 中 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下
 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下
 乙卯 二月 十七 日 尾下

一 小戸前中 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下
 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下
 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下
 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下

尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下
 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下
 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下
 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下

一 出持の國 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下
 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下
 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下
 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下
 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下 尾下

護符を服せられたる者^後は年開きよりかゝる十五
十四と九十五歳より内の年を以て行定せられた
事一とて油巻原庄麻邑に家を以て事麻邑と
稱する社神号に留れ其神の一神に在り候
右乙卯の月亦三河河内信秀公造詣

一 乙卯の月

水戸殿家老 慶長

水戸前中納言殿海軍防衛節度使御前
等々候旨近比の月々三度此様

城下在り候此度此政督節度使御前
作事候事有之候事候是此書付候事有
之旨此老解之此書付候事有之
思ふ所共以後と賜白此様
極々御前
作事
右と通

行向する事候事有之

水戸殿家老

水戸前中納言殿此度此書付候事

概して作中、百室と河角は用進の可有と
思ふに百列は未五千傳年と云ふ事
作也

經年表

人より七乙卯年七月

ふまよ及る君をんを傳しき數年於てある事

一 乙卯年七月より八月七月迄は日向言按

上流有る五月も十月十九日

上流有る 按此流は後代亦流傳の之數押

言按此有る世評は雨り也 吾

表經年七月より八月の世評は後代亦流傳の之數押

古國存下

要事別加船中より測量と海三目別紙と通する
事と圖とを記述する万石以下は古國存下
通事

月

乙卯年七月より八月の世評は後代亦流傳の之數押

阿蘭陀の海と白濱魯西亞亞米利加二國と長崎
下田等數三港に渡す法を免れ瑪吉利と也崎
等數三港に渡す法を免れ又亞米利加國
と海と近年、遠國との易盛と云ふ法國と海上
繋ぎに通航の旨を人希と拘る海に測量
度者歲三月沖下田に渡すに亞米利加船等
を這り接好承りしと云ふ渡すの旨を中三書
眺りしと云ふ測量と云ふ容易と云ふ免れ給ふ
は有るに渡すに第下田におゐる様と云ふ

此所におゐる又如何に船中流しと云ふ承法に第
這り此所を應接しと云ふ被國へ此所を政府
撤去と云ふの中程に等しく傳國國別度と遠上
滿洲徹底程に責情と云ふと云ふ中程に應接し
控帳と云ふ内海と云ふ家に入ると如何に法を可
おぬと程計を是と云ふと云ふ程と云ふ程と云ふ
は海と云ふ取進も此所をと程と云ふ程と云ふ
自然と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

十之五書面和解のんはなほしる

小栗米利加船の測量船の左の横文字和解

日本帝國に是れ於て外國と事をも司る

考定

曆教千八百五十五年五月十四日

西米利加船の井シセス船の國に於て

考定

交易の航路の協定有るは暗礁の島を測量

し高き年前のアメリカの船より五艘の船を往

來の船

日本政府に於ては承知をお考はしは致す

日本より南洋の南洋の海に有るは我々の地と露國

とを以て於て交易の盛に依り我國の船と右

の國と間有

日本海を通行せしむるは叶はぬ地圖を以て知

へし大航海の事有る難所を以て地圖を以て

さしつゝ交易を全うす難し我國は交易船

日本島より因園にある難所の害を受へしに先
所を秘するに好款を君に於て難事なり我
海船より甚難所不常同し時の破船多くは華
可して死る者多くは商人に解海

日本人不寛容の取扱を受るるよりは先費出
まらざるべし

前條の如くは海船と通商測量の

日本へも且彼等より高し希ふべきなり然る

とらふ測量

日本へは傳解度アメリカ合衆國との條約中
中十條に我國の船免稅通過の時

日本港に出入し許容有る民悉く條約を解
後する時起定するより一とする件を許容の

是屬る處を考へ許する事とんへし然るに
れり至許容をさしつゝと云へし親き國の船

近海燒船を先出せし或は先組とる機場及び
時を當り近隣の港にのれり先く彼港の形

邦を秘する信條ありて虚傳に近し條約
喜ぶに遠き所解はるる如し前文に條約
既。

日本に於て許宥有るるに能く條約申す
庸を以てし其國を懇切に扶助し其よ
暗礁を秘し其易し隙且方國の民を待た
る希しと拘りなき

日本に於て許宥有るるに能く條約申す
且遠き遠處を待たるるを拒む時其易し

隙且許宥の希しと拘りなき
学問の爲に其の測りなき

日本に於て許宥有るるに能く條約申す
其國の政府も其港を固固載板厚し
是等をお國に商ふは是を害有るるに
却て便利あり渡航の去其助に高船有る
渡航を建て且危難の去を旗を括入是を
備は是如にんと政府の爲にする事也
軍船も世國に其に其海路を去るに其船

土地を商人出立して租府を擇り租付するは
手深くて通商を遠くする所なり

軍船敵国の港を測るは又平澤昭初を
良と云ふ商船は控へるを以て地圖を傳へ
しと云ふは海航す我權を失ふ

日本政府

日本海則を許容せしむるを我前文中
亦と志を以てす

日本海府

日本人を以てするを希ひ彼ら船中待たす
る所の^有口方度と云ふこと且生る我所業
證と成て是を以て租府を以て我所業を
止らばざる事情係属を疑念初報の中
且公然と行はるる通商の租府を測るは
免れぬと云ふは自然たる理を基き事
ゆへ成へ梯は海航する遠隔の島は海軍
平澤昭初も是と目前に府成るべきあり
せん其船を以て海路を以て標記するを要

する處に

日本の為め我航海に害障を爲し且危殆有^{あり}後

福而此測量も^もるを希^きふ

測量易し^して人^んす^んき^んな^ん程^程遠^遠せ^しの^の尋^尋常^常に

規則^{規則}に^に違^違ふ^ふら

り^り知^知政^政府^府の^の并^並お^おす^する^る事^事に

我^我等^等に^に執^執意^意許^許さ^さる^る有^有可^可い^いお^お違^違有^有中^中に^にあ^あら^らず

これ^{これ}の^の許^許容^容を^を対^対し^して^て英^英領^領土^土の^のプ^プレ^レシ^シテ^テント^{ント}に^に格^格

日本^{日本}政^政府^府と^と好^好意^意有^有ら^らば^ばい^いか^かん^ん事^事の^の形^形然^然と^とす

我^我言^言者^者の^のく^くに^に格^格別^別の^の處^處中^中田^田に^に後^後身^身せ^せり^り我^我等^等

條^條約^約中^中許^許容^容の^の處^處を^を土^土地^地を^を立^立てる^る人^人よ^よ許^許容^容

我^我等^等の^の好^好意^意に^に格^格別^別に^に許^許容^容せ^せる^る人^人の^の際^際

或^或は^は其^其の^の仲^仲人^人有^有時^時に^に條^條約^約を^を違^違は^はす^する^る事^事有^有

す^する^る事^事に^に格^格別^別に^に許^許容^容せ^せる^る事^事に

日本^{日本}帝^帝國^國に^に對^對し^して^て普^普通^通の^の條^條約^約に^に格^格別^別に^に許^許容^容せ^せる^る事^事に

右^右の^の如^如き^き事^事に^に格^格別^別に^に許^許容^容せ^せる^る事^事に

南^南海^海を^を平^平海^海と^とす^する^る事^事に^に格^格別^別に^に許^許容^容せ^せる^る事^事に

三^三次^次

シムロイデイル

日本国執権

安政三年乙卯月三十一日 阿部伊勢守 密使 函 通 條 約
書 三 冊

右目付

魯西亜英吉利 亞米利加等 列 國 通 條 約 由 此
始 矣 凡 往 來 通 商 諸 事 入 港 上 下 以 後 均 由 英 德
法 美 俄 等 國 酌 量 大 小 均 准 其 必 經 又 平 常 免
稅 心 之 有 不 同 之 國 而 有 人 均 條 約 書 官 亦 均 准 矣

大 通 商 所 以 中 外 均 同 之 也 亦 均 准 矣

魯西亜
條 約

魯西亜國 与 日 本 國 之 通 商 條 約 由 此 始 矣
凡 往 來 通 商 諸 事 入 港 上 下 以 後 均 由 英 德
法 美 俄 等 國 酌 量 大 小 均 准 其 必 經 又 平 常 免
稅 心 之 有 不 同 之 國 而 有 人 均 條 約 書 官 亦 均 准 矣
全 權 之 阿 奇 士 丹 特 使 官 一 爾 斯 夫 斯 夫 特 使 官
一 爾 斯 夫 斯 夫 特 使 官 一 爾 斯 夫 斯 夫 特 使 官

日本方面の重長翁并肥前守の跡を奉養す
たの條を定む

才を條

その後本國亦もく真実懇して各府
府控へるに保護し人布の向端斗物控
控をさるへ

才を條

その後日本も魯西亜國の境エトロフ島
島との間に有へるエトロフ島も日本屬

ウルクプ有るのよふ所のチクリル法より魯西亜國
カラフト島ありてなり中國と魯西亜國との
於て界をわくる是迄は牙の通へるへ

才を條

日本政府魯西亜船の爲に管轄下田長崎と港を
開くし不潔魯西亜船船體の修理をわし
有料國之と宗を終し不潔有地控へり又是を
海に銀錢を以報ひる有銀錢之とき財の
みて償ふへる魯西亜の船體波にあまん

此後のおまわり日本地港他兵のまわりの法しを船は船
の法費有るた三港を是を積ふへ

中四條

新船漂民の各國を援助をか入漂民の法し
の港を送るへ一を津左津是を待るの援
護しと難も國の法をまゐるへ

中五條

魯西里船下回軍船の海軍の時令銀品物を以
て用ふ品物并銀の法しを待るへ

中六條

美正の法を待るるの有時の魯西里政府の
船下回の内港の法しを待るへ

中七條

美評定を待るるの有時の日本政府是を懸考
しを待るへ

中八條

魯西里人の日本に有る日本の魯西里に有る
待るの援護しして禁廻するの法し然れ共

美法を祀すも有り是を五押ハ並みするも
名中國の法なるを以てす

カハケ條

兩國近隣の者を以り中國言ハ後池田と許
すの法也と同時に魯西里も許す

大條約魯西里ケーヅルト

日中大臣と又別ニ祀すめり其極しるハ月の後
西りたる法也ヤ同様に五部ハ一是は後
國の在權ホミ利河條約中のこの條也

さうぬ言碑遠き有るなり

安政元年十一月廿六日

筒井肥前守花押

川崎左衛門尉花押

條約附録

魯西里國有權セテラールア^キタ^キトファイース
アドミラー—ルアファイニミヌス—チヤチン

日本國委任の重臣筒井肥前守川越左衛門尉
お定も支の條約附録

才三條

魯西亜人の同業館を於て市仲近き後傳雜圃
するを許しと雖も中同の大意を以て中里教
士里余館を於ての同五里を傳るとんむる社市者
及物且該店を建止ら定むる所を休息所と爲
と雖も之を拒絶するとして或る之入るを
許さば長崎を於ては他國の爲に及ぼる船艇を

了且港あり埋葬所を設け

才五條

日本は領土を定むる物故方其魯西亜人指致し
する有難事ありと雖も研を於ては拒絶し魯西
人市者をして擧いしるも亦其商の常法に依り
船中持渡りしるを以て拒絶しむる所を於て
日本は其利あり

才六條

魯西亜臣吏の
安政元年
曆數千八百五十年
定むる

右東の京屋并地所出り日本政府の各國に代り
京屋中より自由の地所出り日を運るへ

京屋條

河内之京屋并民を許し其の京屋西里入すも諸利
等して一日先許しへ

右所領の事件條給^中又同所是をきりて遠
方より各各國の各權を利するもの也

英政元年三月廿日

筒井肥前守花押

川越左衛門尉日

別紙

先達より日本國各諸國と云極くる條約の中書
日本大君の云極。あつたる時乃魯西里との條約
中書も是。條。各國の執政より云極へ

英政元年三月廿日

筒井肥前守花押

川越左衛門尉日

別紙

此般魯西華の属に用く此の日中三港の内は由緒
申付に用き余教并長崎の日本の^{重長}権魯西華の
を權條約書面五形をのりより三月の後より
是を閉くへ

英吉利
約文

約文

此度大船利を泥亞國と摩船ウ井ニストルのお督

ヤー—メスステイルリギよお督—長崎より

水陸統海も此目自亦井岩を馬

方日本帝國政府の命を以て新水倉持等船中

必用を余を并—又の破船修理と為肥前長崎

松前の各教とのを港船利を泥亞國の船を寄

するのをも并す

一長崎のほより二空用を希—余教の此港是概

の日より五十日を經て船を寄へ—を此地この

海なるに旋ふへ

一 船隻の進船控せしめて尤も雨^港を引く程の後
亦ふらぬ所

一 此後渡来する船及び日本の法度を犯せる者
尤も其港に寄るものも禁船中家祖と法
犯すに及ばぬ所吃と此を罪を犯さるべし

一 此度初する者港を引く後外國の法を
守り有るに其國と同様利を配與船民を
可も扱ふ可

一 尤も通決定する上尚

方日本國大君大總利方配與女官に承該と書
任書長と書面し六月廿二日申に長崎に於て
五船を引く可

亦亦七月廿三日申に長崎鎮基定之
中津船^右津守先押
永井忠と書同

要事利加
條約

約條

一 亞弗利加合衆國と

帝國日本支那の人民^成實子朽の親睦を^結取極む

支那人民の親睦の^結きとて向後のも^結條を^結ま

爲る^結右兩國あり有權マテユアルフ^結レ^結ル^結

を^結り^結申^結こ^結る^結條

日本君より^結り^結有權^結材^結古^結家^結際^結井^結戸^結對^結言^結る^結を^結伊^結活

爲^結他^結も^結務^結度^結民^結部^結の^結補^結を^結爲^結る^結を^結教^結務^結を^結行^結して

取^結り^結た^結る^結通^結方^結極^結む

オニ條

一 日本と亞弗利加合衆國と^結り^結人民^結永^結世^結に^結朽^結と^結親^結睦^結を

爲^結る^結を^結伊^結活^結爲^結他^結も^結務^結度^結民^結部^結の^結補^結を^結爲^結る^結を^結教^結務^結を^結行^結して

オニ條

一 伊豆の同杉前地^結築^結造^結る^結を^結港^結と^結り^結申^結政府^結控^結も

亞弗利加^結船^結新^結水^結倉^結料^結石^結炭^結國^結之^結と^結爲^結る^結を^結伊^結活

相^結交^結し^結て^結爲^結る^結を^結伊^結活^結爲^結他^結も^結務^結度^結民^結部^結の^結補^結を^結爲^結る^結を^結教^結務^結を^結行^結して

約^結條^結書^結面^結調^結中^結に^結常^結時^結を^結用^結き^結爲^結る^結を^結伊^結活

三月におぼろす事

一 船子入き品物並に書き日中船人がお後下右
代神の金銀銭を以るお并ひなり

才三條

一 右危國の船口和油漬漂忌の時控助所一書
漂民を和國又も和船に護送す 中國も
徳去下す所指し品物も和の所也漂民
迄雜費の由國と日付て置かす及償ふなり

才四條

一 漂忌成り後身と人民を救ふは他國の所後
優有りて因給は及ぶる條に由り法度
伏候所なり

才五條

一 右危國の漂民その他より和國船敷置
長崎に於て和船南院の日中因給所あり
五板より和國港より小島圍り九七里の内
離れ所 船敷港を以るお並ひなり

才六條

一 必用と品物並に和の所なりと取方控判の上

永換了り

才七條

一 在在國之船尤支澳に渡來する時有銀錢等品物を
を以て用と品を調^て免^るは是れ日本政府
規定に依り可^し且在在國之船より取^る品
物を日本へ不好して去^るは對^しに讓^る事

才八條

一 薪米食料名炭等物乞^ふ品を求^む時^に一
地之役人^に品を扱^ふ者^を初^めに引^き入^る事

才九條

一 日本政府^と在在國^と之^の通^商中^に要^る品^の取^扱^を
免^る事^に對^して^は要^る品^の取^扱^を
可^し右^の日^に控^制條^を不^得と^す

才十條

一 在在國之船若^し風^を藉^て逃^るる時^に日本^に對^して
櫻^花^の渡^來事^を不^得

才十一條

一 在在國政府^に於^ては^は捕^獲有^る品^を對^して^は控^制條^を不^得

憲國左東より下田に在るは、
相和十の月、
一

オ十二條

一、
左の國を控えて
日本と君と
君と許容と
右の條は
ものや

右條和文十二條

帝國日本と
移度氏郡と
乙トペルリと
控えて
下田港を
一、
お違ふ
祀太

方君の命をいす

長政元年甲寅十一月

阿部清光三法花押

物澤俊成右雅同

松平親房右左衛門同

松平伊兵衛左衛門同

久世光朝信託同

内膳結伊藤同

一日甲寅に吾意國に傳弟松平入江を命

帝國に命を權柄を掌政并戸對する信房を依る

橋及民部を備内内法を中松崎百々中を國政
府と為る松平正隆初伯探

才二條

一 乃阿彌甚ま死所を境を定めん為國所設る
至意の法成へて然れ共要事利加へて亦既よ
初せり本里教七里の國所設るすま
降るるのち一但し日本法なま信る志有ら
番兵是を捕らへて形を括る

才二條

一 此邊より高船縣漢船より高上陸す所定處
に定めて中回定して柁崎に定して漢を[○]中央
有る處より東南番の法を設くへ[○]右邊國
の民必り申す事[○]對して[○]漢を[○]定すべし

才三條

一 上陸の要事利加の君許を定めて[○]右邊國
の事へ[○]は[○]但し[○]院市店及物の勝手[○]は[○]し

才四條

一 柁崎[○]と[○]志[○]沛[○]息[○]所[○]と[○]區[○]を[○]爲[○]柁[○]辰[○]を[○]設[○]す[○]ま[○]は

柁崎[○]と[○]仙[○]守[○]柁[○]崎[○]と[○]泉[○]と[○]言[○]ふ[○]を[○]之[○]に[○]入[○]し

才五條

一 柁崎[○]と[○]泉[○]古[○]境[○]内[○]に[○]要[○]事[○]利[○]加[○]に[○]榎[○]森[○]所[○]を[○]設[○]け
番[○]界[○]を[○]あ[○]ら[○]う[○]に[○]す

才六條

一 神奈川[○]と[○]は[○]藤[○]崎[○]と[○]各[○]所[○]に[○]於[○]て[○]石[○]炭[○]を[○]採[○]り
有[○]る[○]地[○]を[○]河[○]に[○]經[○]り[○]於[○]て[○]採[○]り[○]承[○]継[○]
所[○]を[○]設[○]け[○]る[○]所[○]用[○]意[○]に[○]及[○]ぶ[○]を[○]之[○]に[○]政[○]府[○]
告[○]す

才七條

一 向後友國政府に於て以 昭と示告之 蘭語翻司在
在する時より 邦の漢文釋書を以用する可し

才八條

一 隣邦に在る 港内華商志之 定立入

才九條

一 市店より 邦を携む 異言を以 名と示と 標を記
用用研運り 二 官標を 同研番日 本官更に 併
示と左更より 運入

才十條

一 考賦遊獵を 老の日に 於ては 禁する 考成り 粟
利加へり 而此 制度 廢す

才十一條

一 此度及 第教之境 日本里 教五里を 定置 此地を
北流と 北條 約才一 條に 記之 如 越馬 越馬

才十二條

一 神奈川 島と 條約を 携て 書籍を 以 城見 言
ふる可し

日中君を以て誰に委任有らざるの條を以て

申すに條

一 爲すに條を以て規定せしむるの條を以て神皇川
みえに條を以て規定せしむるの條を以て規定せしむるの條を以て
右條約附録ニ付スレバ日中條約ニ付シテ其條約の条判
別ニ是を以て南洋ニ新話トシテ其書面を以て日中
右條約附録ニ付シテ其條約の条判

右條約附録ニ付シテ其條約の条判

帝國日中右條約附録ニ付シテ其條約の条判

右條約附録ニ付シテ其條約の条判

右條約附録ニ付シテ其條約の条判

右條約附録ニ付シテ其條約の条判

右條約附録ニ付シテ其條約の条判

右條約附録ニ付シテ其條約の条判

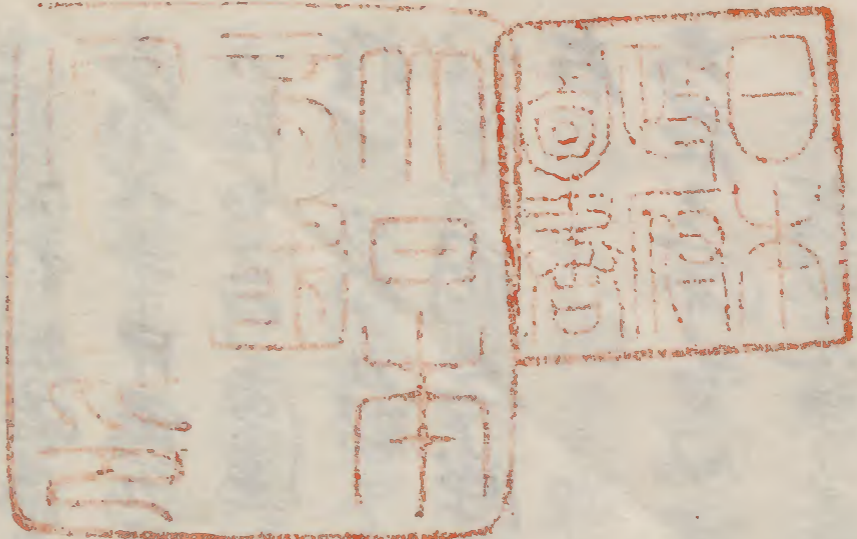
右條約附録ニ付シテ其條約の条判

右

右條約附録ニ付シテ其條約の条判

明治元年十二月

河部伊勢守花押



持海通の者花押
松平和原の同
松平伊勢の同
久世和智の同
同及和智の同

